

# 中國語の着點を表す結果表現に関する一考察

——廣東語の“V O 啲 [hai] L”構文を中心に——

横 田 文 彦

## 0. はじめに

中國語（標準語）では一般に、他動表現<sup>1)</sup>において対象（目的語）の變化結果あるいは移動の着點を表す場合、動詞の直後に結果を表す語句（「結果述語」と呼ぶことにする）が置かれ、いわば語彙的な複合化がおこなわれる。

### (A) 動詞+結果補語

(1) 小孩儿弄坏了杯子。(子供がコップを割った。)

### (B) 動詞+場所フレーズ

(2) 他把那本书放在桌子上。(彼はその本を机の上に置いた。)

動作主（“小孩儿”“他”）の行爲（“弄”“放”）により、その働きかけの対象である目的語（“杯子”“那本书”）が、結果として何らかの状態變化や位置變化（“坏”“在桌子上”）をとげることを表現している。ここで重要なことは、(A) (B) いずれの場合でも、動詞とその後置成分である結果述語との間には、目的語をはじめその他のいかなる成分をも置くことはできないことである。

一方、廣東語で同様の意味を表す表現を見てみると、

(A) のタイプは標準語と同じである。

(3) 個細路哥整爛咗隻杯。(子供がコップを割った。)

〔个小孩儿弄坏了只杯子〕<sup>2)</sup>

ところが (B) のタイプでは事情が大きく異なる。

(4) 佢放咗嗰本書喺 枱 上便。(彼はその本を机の上に置いた。)

〔他放了那本书在桌子上边〕

のように、目的語“嗰本書”が動詞“放”と場所フレーズ“喺枱上便”の間に割って入るといふ、標準語には通常見られない形を取る。ただし、標準語同様

に處置式（廣東語は“將”を用いる）を使って、

(5) 佢將嗰本書放咗喺 枱 上便。

〔他把那本书放在了 桌子 上边〕

のように言うこともできる（ただしその場合でもアスペクト辭“咗”が動詞と結果述語との間に割って入ることに注意）が、廣東語では處置式構文の使用頻度はあまり高くなく、より一般的には（4）のように、

V O 喺 L （V = 述語動詞、O = 目的語、L = 場所を表す語句）

という、“VO”の語順はそのままに、移動の着点を表す結果述語“喺L”が“VO”全體の後ろに継ぎ足される形をとる。

標準語では結果表現が（A）と（B）とで統語上共通の形をとる（いわば目的語がはじき出され、動詞と結果述語の語彙的な複合化がおこなわれる）のに對して、廣東語では（A）と（B）とで事情が對照的であり、（B）では標準語のような動詞と結果述語の複合化が見られない。

本稿では、廣東語における（B）タイプの表現の典型として結果表現“VO 喺L”構文を取り上げ、關連表現にも觸れつつかつ標準語との對照も視野に入れながら、中國語結果表現の一側面について考えてみたい。

## 1. 廣東語の“VO 喺L”構文

### 1-1. 後置型の“喺L”<sup>3)</sup>

張洪年（1972）では、後置型の“喺L”を“粘付性词组补语”（「膠着性フレーズ補語」）と位置付け、

坐喺位處（席に座る）

〔坐在位子那儿〕

のような例を挙げ、“中间根本不容许第三成分或停顿的插入”（“坐”と“喺”の間には他の成分やポーズを入れることはできない）としている。しかしながら實際には例えば、

(6) 佢坐咗喺張椅上面。（彼は椅子の上に座った。）

〔他坐了 在椅子上面〕

のように動詞と“喺”の間にはアスペクト形式が自由に生起するので、“粘付性”とは言えない。

また、場所フレーズ“喺L”が動詞の前に位置するか後ろに位置するかによって生ずる意味の違いについては、

前置型：“表示动作在什么地方发生”（動作がどこで発生したのかを表す）

喺水度搵個波（水の中でボールを投げる。）

〔在水那儿扔个球〕

後置型：“表示动作所达到的地方”（動作が到達した場所を表す）<sup>4)</sup>

搵個波喺水度（ボールを水の中に投げる。）

〔扔个球在水那儿〕

とし、後置型の“喺L”が着点表示であることを明確にしている。

ここで前置型について簡単に觸れておくと、例えば、

(7) 我喺食堂裏便食飯。（私は食堂でご飯を食べる。）

〔我在食堂里边吃饭〕

という文は、決して、

\* 我食飯喺食堂裏便。<sup>5)</sup>

〔我吃饭在食堂里边〕

のように言うことはできない。前置型はあくまで“喺食堂裏便”が主語“我”の動作を行う場所を示すものであり、動作の及ぶ対象“飯”が“食堂裏便”にあることを積極的に指向するものではないからである。<sup>6)</sup>

一方 Matthews and Yip (1994) では、後置型の“喺L”について、「置く」動作を意味する他動詞の目的語の後で、場所を表す前置詞フレーズが使われる。」（千島等 2000 譯）と説明し、本稿で問題とする他動表現を扱っている。以下その例。

唔該你放啲 嘢 喺 枱 上面。（ちょっとそれテーブルの上に置いといて。）

〔麻烦你放些东西 在桌子上面〕

我掛幅 畫喺嗰度。（私は繪をそこに掛けた。）

〔我挂幅畫儿在那儿〕

以上の主な先行研究を踏まえて、廣東語の“VO喺L”構文についてさらに詳しく見ていく。

## 1-2. “VO喺L” 構文の動詞Vと目的語O及び標準語との相違点

“VO喺L” 構文に入ることのできる他動詞は、動詞の表す動作が及ぶ対象(目的語)がその動作の作用によりある位置に到達する、または動作の作用により生産・作成されたものが結果としてある場所に存在する、という意味素性を持つものである。<sup>7)</sup> これには以下のように大まかに分けて二種類ある。

「置く」類— 掛(掛ける) 擺(竝べる) 存(預ける) 擠(置く、入れる) 停(止める) 留(残す、置いておく) 漏(置いていく)  
收埋(隠す) 跌(落とす) 攄(投げる) 丟(投げる、捨てる) 掉(落とす、捨てる) 貼(貼る) 裝(取り付ける、盛る、注ぐ) 等

「書く」類— 畫(繪を描く) 寫(字を書く) 刻(彫る) 繡(刺繡する)  
起(建てる) 等

「置く」類動詞の例

- (8) 佢擺緊啲書喺張枱上便。(彼は机の上に本を竝べている。)  
〔他摆着些书在桌子上边〕
- (9) 我已經存咗啲錢喺銀行。(私はもうお金を銀行に預けた。)  
〔我已经存了些钱在银行〕
- (10) 佢擠咗個銀包喺袋處。(彼は財布をポケットに入れた。)  
〔他放了个钱包在口袋那儿〕
- (11) 你停架車喺門口度。(車を入り口のところに停めてください。)  
〔你停辆车在门口那儿〕
- (12) 佢漏咗支筆喺間房度。(彼はペンを部屋に置いていった。)  
〔他落了支笔在房间那儿〕
- (13) 你收埋啲乜嘢喺枱下便? (机の下に何を隠したの。)  
〔你藏些什么在桌子下边〕
- (14) 我跌咗條手巾仔喺地下。(私はハンカチを地面に落とした。)  
〔我丢了條手绢在地下〕

「書く」類動詞の例

- (15) 啲細路哥畫緊幅大畫喺牆上面。(子供たちは壁の上に大きな繪を描いている。)

〔那些 孩子 畫着幅大畫在牆上面〕

(16) 佢起咗間屋 喺嗰度。(彼はそこに家を建てた。)

〔他盖了间房子在那里〕

次に、“VO喺L”構文では目的語の単数・複数、特定・不特定<sup>8)</sup>に関わらず、広い範囲のものが目的語になりうる。<sup>9)</sup>

(14) 佢放咗一本书喺 枱 上便。(彼は一冊の本を机の上に置いた。)

〔他放了一本书在桌子上边〕

(15) 佢放咗幾本书喺 枱 上便。(彼は何冊かの本を机の上に置いた。)

〔他放了几本书在桌子上边〕

(16) 佢放咗本书喺 枱 上便。(彼は一冊の／その本を机の上に置いた。)<sup>10)</sup>

〔他放了本书在桌子上边〕

(17) 佢放咗啲書喺 枱 上便。(彼は何冊かの／それらの本を机の上に置いた。)

〔他放了些书在桌子上边〕

(18) 佢放咗嗰本书喺 枱 上便。(彼はその本を机の上に置いた。)

〔他放了那本书在桌子上边〕

(19) 佢放咗嗰啲書喺 枱 上便。(彼はそれらの本を机の上に置いた。)

〔他放了那些书在桌子上边〕

このことは“VO喺L”構文の生産性の高さを物語るものであるが、標準語と比較すると廣東語におけるこの構文の獨自性がよりいっそうはっきりする。

標準語では、目的語が特定のものである場合、

(2) 他把那本书放在桌子上。

(20) 他把那些字寫在黑板上。

のごとく必ず處置式を用い、“在L”は結果述語として動詞の後に置かれる。

それに對し、目的語が不特定のものである場合、“在L”が述語動詞に前置される形で動作の対象の到達点を表すのが一般的である。

(21) 他在桌子上放了一本书。

(22) 他在黑板上寫了几个字。

ただし、目的語となる名詞に數量詞が伴う場合には、まれに“VO在L”が使われることがある（山口 1998a 参照）が、現在ではすでに使用頻度・容認度が

極めて低く、特殊なものになっている。(後述する。)

？ 他放了一本书在桌子上。

？ 他寫了几个字在黑板上。

このように動作の対象の到達点を表す前置型の“在L”(本来はあくまで動作主が動作を行う場所を表す)については、主語関連の領域表示機能が目的語関連にまで拡大したという見方がある。

盧 (2000) :

小李在黑板上寫字。

小李在桌子上擺書。

その場所は“小李”の所在ではないものの、“小李”の指が接触する場所か“小李”が目を向ける場所であって、動作主の影響する領域 (domain) であることが分かる。つまり、“黑板”も“桌子”も動作主が目指したり影響したりする場所であり、“在”でマークする場所は動作主の支配可能な領域内の範囲なのである。

いっぽう廣東語では、目的語が不特定のものである場合、その目的語の着点表示として標準語のように前置型で言い立てることは不自然になるか、動詞の種類によっては成立するものの、意味するところは後置型とは違って来る。

「置く」類—そもそも不自然である。

\* 佢喺枱上便放書。<sup>11)</sup>

？ 佢喺枱上便放咗幾本書。<sup>12)</sup>

「書く」類—前置型が成立するが、後置型とは意味するところが違う。

(23) 我喺黑板上便寫字。(私は黑板に字を書く。)

[我在黑板上边寫字]

(24) 佢喺黑板上便寫咗一個字。(彼は黑板に字を一つ書いた。)

[他在黑板上边寫了一个字]

(25) 佢寫咗一個字喺黑板上便。(彼は黑板に字を一つ書いた。)

[他寫了一个字在黑板上边]

インフォーマントの直観では、(25) は「書かれた字が黑板の上に存在している」ことを表し、(23)、(24) は、別に「彼が黑板の上に載っている」という

ことではないが、「彼が黑板に面と向かっている」、「彼の指が黑板に直接觸れている」状況が想定され、意味するところは明らかに違うという。（このことは、先にあげた盧（2000）における分析とも大いに関係があろう。）

このように廣東語において、目的語が不特定のものである場合、「置く」類と「書く」類で構文上の振る舞いに違いが見られる（標準語には見られない）のは、

ものが置かれる等の「場所」—もの（動作対象）が到達しそこに存在するところとしての認識だけが働く→後置型のみ  
字が書かれる等の「場所」—動作主の支配領域内であるとの認識とも（動作対象）が到達しそこに存在するところとしての認識の両方が可能

であるからと分析できる。

以上の議論を簡潔にまとめれば、次のようである。

標準語

把O V 在L（Oが特定）

在L V O（Oが不特定あるいは裸名詞）

廣東語

V O 喺L 「置く」類

「書く」類——cf. 喺L V O（Oが不特定あるいは裸名詞）

このように、同様の意味を表す表現において、標準語と廣東語では統語構造に著しい違いが見られるわけであるが、その違いをどのように考えればよいのだろうか。それにはまず中國語文法の歴史的な側面から見ていく必要がある。

## 2. 動詞と結果述語の複合化

### 2-1. (A) 動詞+結果補語

中國語の多様な動補構造の成立過程は非常に複雑であり、ここでそれを詳述する餘裕はもたないが、本稿で問題とする、動詞と目的語の變化結果を表す補語成分との複合化についてごく大まかに言えば、

$V t + V i \longrightarrow V t + V i + O \longrightarrow V + C + O$

$V t + O + V i \longrightarrow V + O + C \longrightarrow V + C + O$

(V t = 他動詞、V i = 自動詞 (形容詞も含む)、C = 補語)

という二つの大きな流れの中で成立したものであり、<sup>13)</sup> 現代では標準語にせよ廣東語にせよ“V O C” (例えば、“當打汝口破 (おまえの口を打ち割るぞ)”) 太田 1958) という語順はもはや認められない。アスペクトなどの接辭が付くのも“V C”全體の後ろである。(0. はじめに の例文参照)

石村 2000a では、動詞と結果補語の複合化の原因を、R (結果補語) のヴォイス轉換 (使役動詞化) のために原因となる述語 (V) が導入されることで、V R という語順 (統語的な型) の力を利用して語彙的使役機能を獲得することにあるとしている。(以下の例は石村 2000a)

孩子 撕 书皮儿 书皮儿 破了

→孩子 撕 破了 书皮儿。(子供が本の表紙を引き裂いた。)

このような語順の操作には、結果から (原因となる) 働きかけを眺める認知的視點が働いており、結果に重點が置かれるために結果に對し原因・行爲が繼ぎ足されるといふかたちで、結果表現が成立していると考えられる。<sup>14)</sup>

廣東語でも (A) タイプの結果表現ではまったく同じことが言える。一方 (B) タイプにおいては、動詞と結果述語の複合化が行われているわけではないので、更なる考察を必要とする。

## 2-2. (B) 動詞+場所フレーズ

石村 2000b ではさらに、“V 在 L”形式についても、結果補語と同様の意味構造をもつものとして、同じ體系の中で捉え論じている。やはり、“V”と“在”の複合化の動機を「後項述語 (“在”) の使役動詞化にある」と捉え、“在”をこの複合形式における中心語に位置付け、複合化は結果から行爲への視點の反映であると分析する。

では、廣東語における (B) タイプすなわち“V O 喙 L”については、どのように考えればよいのだろうか。形式を見て明らかのように、複合化がそもそも行われていないのだから、使役義の獲得が複合化と密接に関わっているとはもちろん言えない。“V O 喙 L”構文それ自體が持つ使役性 (例えば、「本を置いてその結果本を机の上に存在せしめる」) はあくまで、兼語型の構文的な統語力によって支えられているのである。



さらに、先に觸れたように（B）タイプについては、目的語の性質による標準語と廣東語との統語上の違いの問題もある。そこで（B）の動詞+場所フレーズの歴史的變遷について概観すると、張楨 1998 では、全體的傾向として、古くは主として動詞（+目的語）の後ろに置かれていた場所を示す介詞フレーズ（“於”“在”<sup>15</sup>等）が、動作の結果としての到達點（“动作的归结點”）を表すものを除いて、時代が降るとともに漸次動詞の前に置かれるようになった過程を、豊富な資料をもとに詳細に檢證している。その記述の中で特に興味深くまた本稿の論述とも直接關係すると思われるのは、“在L”が動詞の後ろに置かれる条件が、意味の上で動作の到達點（“动作的归结點”）を表すことの他に、時代を降るにしたがって次第に、動詞の後ろに他の成分（目的語、補語、アスペクト辭等）が何も無いときに限られてくるようになる（動詞との複合化）、逆に動詞の後ろに他の成分があれば“在L”は動詞の前に置かれる傾向が強くなっていくということである。すなわち、

V X 在 L → (X) V 在 L

V X 在 L → 在 L V X (Xは典型的には目的語)

また、明代まで降ると、VO在Lが大體、將/把O在L（處置式）に取って代わられるようになり、VO在Lが成り立つ条件として、一般にOの前に數量詞を伴うときに限るとしている。現代の標準語で、目的語が不特定の場合の構文現象（“在LVO”）とも密接な關わりがあると思われる。

さらに伊原 1986 では、明清期の「兼語式」“VO在P”“VO到P”“VO給P”“VO出來”等を取り上げ、この中で“VO在P”だけが早く衰退していったことを次のように言う。

“VO在P”は、基本的には移動と定着という二義性を持っているが、一方他の兼語式は移動を示すという點で、両者は性格をやや異にする。（中略）兼語式は、移動を示すものへと推移しつつ、二義性を持つ“VO在P”を排除しようとする傾向があった（後略）現代では普通、使役を表す動詞のみが兼語式に用いられるが、舊白話ではいろいろな動詞がそれに用いられた。（中略）いずれの型も北方において早く衰退し、南方では比較の後まで用いられ續けたことが知られた。こうした一連の動きは、定着・移動という二義性を排除して、

移動のみを示すものへと變化する方向で推移したものと見られる。

石村 2000b ではこれをうけて、“V在L”と“V到L”を比較し、移動と所在の連続性の観点から、前者には目的語が割って入る餘地がないのに對し、後者では“VO到L”という語順が可能であることに觸れている。以下の二例は石村 2000b。

母亲领孩子到房间里來了。(母親は子供を連れて部屋にやって來た。)

小王推自行车到存车处去了。(王君は自轉車を押して自轉車置き場に行った。)

この二文はもちろん處置式でも表現できるわけだが、處置式(“V”と“到”の複合化)における表現上の重點が移動結果から行爲へと移行するのに伴い、“V”と“到”の間に目的語が割り込むと見る。すなわち、

“V在L”が對象の變化結果の方に視点を絞り込むのに對し、方向補語を使った「移動表現」の場合、行爲の方に意味の比重が置きやすくなるからである。

と、先ほどの結果補語におけるのと同様に(石村 2000a) 認知的観点から分析する。

では、廣東語において動詞と場所フレーズが複合化されていないことについては、どのような分析が可能であるか。“VO喙L”構文から少し範圍を広げて考えてみたい。

### 3. 廣東語の關連する表現

#### 3-1. 補語と目的語の位置關係

先に2-1. で、動詞と結果補語の複合化について先行研究を概観したが、複合化というのは、裏を返せば目的語をはじき出すことでもある。現代標準語では、廣い意味で「補語」と呼ばれるほとんどの形式が、方向補語の一部(“拿一本书來”“拿出一本书來”“拿一本书出來”)を除き、目的語(動作の對象)がはじき出されて動詞と補語成分との結びつきが緊密となっている。それに對して廣東語では、様相が大きく異なる。

程度補語(様態補語)

V得OC（V得COも可）

(26) 你搵得錢多。（あなたは稼ぎがいい。）

〔你挣得钱多〕

(27) 佢行得黑路多，終會撞倒鬼。（彼は夜道をよく歩くので、しまいには幽霊に出くわすよ。）

〔他走得黑路多，終會碰到鬼〕

(28) 佢食得肥猪肉多，所以肚痾。（彼は豚の脂身をたくさん食べたので、腹を下した。）

〔他吃得肥猪肉多，所以拉肚子〕

可能補語<sup>16)</sup>

V得OC（V得COも可）

(29) 我一定食得佢晒。（私はそれをきっと食べきれぬ。）

〔我一定吃得它完〕

(30) 我瞞得佢過。（私は彼のことを欺きおおせる。）

〔我瞒得它过〕

(31) 呢處坐得三個人落。（ここは3人座れます。）

〔这里坐得三个人下〕

VO唔C（V唔COも可）——V唔OCではない（上の肯定型とは形の上で對稱的でない）。

(32) 我見佢唔倒。（私は彼に會えなかった。）

〔我见他不到〕

(33) 你打佢唔過。（きみはけんかで彼に勝てないよ。）

〔你打他不过〕

(34) 點都搵佢唔倒。（どうしても彼が見つからない。）

〔怎么都找他不到〕

方向補語

VOD（D = 方向補語）の形式しかとれない。（標準語はVDOも可）

(35) 唔該你拎本書嚟啦。（本を一冊／その本をもってきてください。）

〔麻煩你拿本書來〕

\* 拎嚟本書〔拿來本書〕

(36) 佢擺咗一本書出嚟。(彼は本を一冊取り出した。)

〔他拿了一本书出來〕

\* 擺出嚟一本書／擺出一本書嚟

〔拿出來一本書〕〔拿出一本书來〕

以上のように、廣東語では純粋な結果補語を除いて動詞と補語成分の間に目的語が割って入る形式が廣範に使用される。目的語の位置に関する標準語との違いは、“VO 喺 L” 構文に限ってのことではなく、廣く廣東語の文法現象に渡っている。

因みに唐代宋代は、中國語の長い歴史の中でも動補構造が多様に發達していた(言い換えれば混沌としていた)時代である<sup>17)</sup>が、全體的に眺めて廣東語の動補構造の様相がこれと大變似通っていることは非常に興味深い。(古屋 1985 に詳しい。)

### 3-2. “喺” 以外の動詞

先ほど (B) タイプについて、標準語では対象の「移動」に重點を置くかどうかで構文が違って来る傾向があることに觸れた(2-2. 井原 1986、石村 2000 b)が、廣東語では「移動」もちろん含めて様々な事態を言い表すのに、結果述語が場所フレーズであるものに限らず、動詞と目的語に結果述語がそのまま継ぎ足される形での表現がごく普通であり、多用される。(3-1. 方向補語の例文も参照)

(37) 佢放咗啲 嘢 去個 箱 裏便。(彼はそれらのものを箱の中に入れた。)

〔他放了些东西去个箱子里边〕

(38) 佢放咗啲 嘢 入個 箱 裏便。

〔他放了些东西进个箱子里边〕

(39) 佢放咗啲 嘢 入去個 箱 裏便。

〔他放了些东西进去个箱子里边〕

(40) 我寄咗封信到日本。(私は手紙を日本に送った。)

〔我寄了封信到日本〕

(41) 我寄咗封信去日本。

〔我寄了封信去日本〕

(42) 我寄咗封信去到日本。

〔我寄了封信去到日本〕

(43) 佢分咗啲錢畀大家。(彼はお金を皆に分けた。)

〔他分了些钱给大家〕

(44) 佢譯 咗呢句話成廣東話。(彼はこの文を廣東語に譯した。)<sup>18)</sup>

〔他翻译了这句话成广东话〕

(45) 我送一本書畀你。(本を一冊あなたにあげる。)

〔我送一本书给你〕

\* 送畀你一本書 (送给你一本书) ? 畀你送一本書 (给你送一本书)

(46) 我畀咗一本書畀佢。(私は本を一冊彼にあげた)

〔我给了一本书给他〕

標準語では、(43) (45) のような場合を除いて、上のように言い立てることはできない。

また、上には述べなかったが“啲”を用いる表現で、存在動詞“有”が使われるものがあるのは注目に値する。

(47) 我而家有錢喺身。(私は今お金を持っている／身に付けている。)

〔我现在有钱在身〕

このように廣東語では、目的語が動詞と共にあってもVO全體にそのまま継ぎ足される形で、さまざまな事態を言い立てられることがわかる。

#### 4. まとめ

今までの議論から、以前に提出した疑問点について可能な限りの總括的な解釋を試み、本稿のまとめとしたい。

標準語では、

他放了一本书在桌子上。

という構文が、現代においてもはや容認度・生産性の低いものになっているという事實は、なによりも中國語の歴史的變化を反映していると考えられる。すなわち、

- ① “放”が要求する項は、もちろん本來的には“一本书”であり、その移動の着点を表すのに働きかけにそのまま結果を繼ぎ足す形で“放一本书在桌子上”という構造が通時的に成立していた。
- ② 語彙的な使役義獲得のための動詞と補語の複合化により、目的語と補語の語順の逆轉が起こるといふ歴史的要因が存在する(その典型は結果補語)。
- ③ 複合化された“放在”が要求するのは“放”の項ではなく、“在”の項であるから、“放”の項をもっとも無理のない形で処理をする手段が處置式である(事實動補構造の發達が處置式の發達に貢獻している。李訥、石毓智 1999 参照)。
- ④ 處置式には“把”でマークされる成分が特定のものでなければならないといふ統語上の制約から、“一本书”を動詞に前置することもできない。
- ⑤ 「所在」といふのは本來靜的指向であり、對象に對する働きかけの結果としての對象の移動着点=所在は、働きかけを行う動作主の「所在」と認識パターンとして同一視するのに無理がない。(「移動」は動的指向であり、本來的に結果としての「所在」ではなく行爲の過程に重點が置かれるため動作主あるいは對象の「所在」に對する關心を必ずしも要求しない)
- ⑥ かくして、本來なら變化對象の結果としての視座が置かれ前景化(後置)されるべき“在L”は、主語の支配領域内(「所在」)に組み込まれることで背景化される(動詞に前置される)に至った。——>他在桌子上放了一本书。

といふ一連の流れが推測される。そしてこの推測を裏付けるものとして、張績 1998 のいふ、

V X 在 L ——> (X) V 在 L

V X 在 L ——> 在 L V X (X は典型的には目的語)

この歴史的變化の事實は重大である。

また、廣東語で(B)タイプの結果表現において、動詞と結果述語の複合化が見られないことは、以下のように考えられる。

- ① 結果補語を除く多くの形式において、動詞の目的語に對する強い支配力が保たれている(「VO」の語順を崩さない)といふ、中國語の歴史的側面の反映と相俟った強い傾向の現れである。

- ② 認知的視点に基づけば、たとえ結果表現において視点は結果から行爲を眺める方向性に置かれようと、あくまで行爲（働きかけ）の過程を重視する。
- ③ 広い意味で使役と捉えられる事態は、兼語型（「VO」の語順を守る）を用いる。
- ④ 目的語の性質によらない“VO喙L”をはじめとする同種の構文における生産性の高さが保持されている。
- ⑤ 以上のことは、廣東語において處置式が標準語に比べてあまり用いられないことにも大いに関係があると考えられる。

追記:使用した例文については、参考文献からの引用以外のものは、すべてインフォーマントによるチェックを受けました。ご協力くださった凌志偉氏、黃愛萍氏、のお二人にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

#### 註

- (1) 本稿では他動表現のみを取り上げる。
- (2) 比較対比の便を考慮し、参考までに〔 〕内に単語レベルでの標準語による逐語譯を示した。文としての成立不成立は一切問わない。
- (3) 本稿では、「喙L」が述語動詞（V）の後ろに位置するものを「後置型」、前に位置するものを「前置型」と呼ぶことにする。標準語の「在L」についても同様である。
- (4) 高華年（1980）にも同様の説明がある。
- (5) \*は、その文が成立しない（非文である）ことを表す。
- (6) 標準語に関して前置型「在L」の意味機能については、これまでに多くの先行研究で言及されている。特に後置型との比較に焦点を当てたものが多い。主なものは本稿参考文献欄参照。
- (7) これに對して前置型“喙LVO”では、動作主が動作を行う場所をとると考えられる他動詞は、意味上選擇の制約を受けずVの位置に入ることができる。（盧濤2000）
- (8) 本稿では、「特定」は典型的には「(指示詞) + 量 + 名」を、「不特定」は「(數詞) + 量 + 名」を指すこととする。目的語名詞の定性について詳しくは陳平1987、山口1988a 参照。
- (9) 裸名詞については、例えば“書”等一般的にはなじまない（\*佢放咗書喙枱上便。廣東語でそもそも「本を置く」という場合、實際の發話で“放書”とは言わず、必ず量詞を伴うことが調査の中で觀察された。）が、一部“錢”（お金）“行李”（荷物）等の名詞は、量詞等を伴うのが自然ではあるものの、裸のままでも必ずしも

この構文に入らないことはないというインフォーマントの意見があった。ただ、インフォーマント間でも揺れが見られたので、この問題はさらなる調査と検討を要する。

- (10) 廣東語では、「量詞+名詞」が特定・不特定の両方を表しうる。本書喙柏上便。(=咽本書喙柏上便。)のように主語の位置に立つことができる。「量詞+名詞」の文法的機能については、牧野 1991、1995 に詳しい。
- (11) 裸名詞の場合は明らかに非文となる。注 9 参照。
- (12) 言って言えないことはないが、「彼が机の上に載っている」という意味にしかとりようがなく、實情にそぐわない。
- (13) 王力 1958、太田 1958 をはじめとして、多くの先行研究がある。本稿で主に参考にしたものについては、参考文献欄参照。
- (14) 石村 2000 では、このような認知的視点について影山 1996 を引く。影山 1996 で論じられている認知的視点については本稿でも大いに参考に預かっている。
- (15) 魏晉南北朝期には、“V (O) 於 L” “V (O) 在 L” の他に “V (O) 著 L” 構文が多く使用されていた。例 “内豆著甕中 (豆を甕の中に納める) 古屋 1999”。この構文は前二者同様、廣東語の “V O 喙 L” 構文に形式、意味ともに酷似している。古屋昭弘教授のご教示による。詳しくは、古屋 1999、張績 1998、2000 参照。
- (16) 目的語が補語に優先するのは、目的語が代名詞のときが大部分であるが、(31) のような例もあるので一概には言えない。ただ、否定の時はまず代名詞しか入らないのがインフォーマント調査で観察された。
- (17) 多様な発達の開始が魏晉南北朝期、次第に整理されていったのが元明期以降である。古屋昭弘 1985、蔣紹愚 1994、李訥、石毓智 1999 等参照。
- (18) この例については、インフォーマントの間で揺れがあった。参考として挙げておく。

### 参考文献

- 張洪年 1972 《香港粵語語法的研究》香港中文大學碩士論文。香港中文大學出版  
高華年 1980 《廣州方言研究》商務印書  
Stephen Matthews and Virginia Yip 1994 *Cantonese: a comprehensive grammar*. London and New York: Routledge (千島英一等譯 2000 『廣東語文法』東方書店)  
朱德熙 1981 <“在黑板上寫字”及相關句式> (修訂稿) 《語言教學與研究》第 1 期  
范繼淹 1982 <論介詞短語“在+處所”> 《語言研究》第 1 期  
郭熙 1986 <“放到桌子上”“放在桌子上”“放桌子上”> 《中國語文》第 1 期  
陳平 1987 <釋漢語中與名詞性成分相關的四組概念> 《中國語文》第 5 期  
陸儉明 1993 《八十年代中國語法研究》商務印書館  
金立鑫 1993 <“把 O V 在 L”的語義、句法、語用分析> 《中國語文》第 5 期  
劉月華 1998 《趨向補語通釋》北京語言文化大學出版社  
俞詠梅 1999 <論“在+處所”的語義功能和語序制約原則> 《中國語文》第 1 期  
沈家煊 1999 <“在”字句和“給”字句> 《中國語文》第 2 期  
盧壽 2000 『中國語における「空間動詞」の文法化研究』白帝社  
山口直人 1988a 「介賓連語補語の特殊なものについて—特に「在+場所」の場合」『折



尾女子經濟短期大學論集』第23號

- 1988b 「“在+處所”に關連する2つの問題」『北九州大學大學院紀要』創刊號  
1999 「“V在+L”構文の他動性について」『中國語學』246號
- 石村廣 2000a 「中國語結果構文の意味構造とヴォイス」『中國語學』247號  
2000b 「“V在L”形式と結果表現」東京都立大學人文學部『人文學報』311號
- 牧野美奈子 1991 「廣東語の量詞について—「現物指示」と「同類指示」—」『中國語學』238號  
1995 「廣東語の指示詞と<量+名>」『中國語學』242號
- 吉川雅之 1998 「香港粵語研究史：語法部份」科研「中國における言語地理と人文・自然地理」研究集會發表論文
- 飯田真紀 2000 「廣東語の方向動詞の補語機能」『東京大學中國語中國大學研究室紀要』第3號
- 王力 1958 《漢語史稿（中冊）》科學出版社（中華書局1980《漢語史稿》修訂本）
- 太田辰夫 1958 『中國語歷史文法』江南書院
- 古屋昭弘 1985 「宋代の動補構造“V教（O）C”について」『中國文學研究』第十一期早稻田大學中國文學會  
1999 「『齊民要術』の“V令C”“V著O”について」『中國語學研究開篇』19 好文出版
- 伊原大策 1986 「所謂「兼語式」の變遷について—“VO在P”“VO到P”“VO給P”“VO出來”など—」『中國語研究』白帝社
- 梅祖麟 1990 <唐宋處置式的來源>《中國語文》第三期  
1991 <從漢代的“動、殺”、“動、死”來看動補結構的發展>《語言學論叢》第16輯
- 蔣紹愚 1994 《近代漢語研究概況》北京大學出版社
- 李訥，石毓智 1999 <漢語動補結構的發展與句法結構的嬗變>《中國語言學論叢》第二輯
- 張楨 1998 《漢語補所介詞詞組和工具介詞詞組的詞序變化》北京大學博士論文  
2000 <魏晉南北朝時期“著”字的用法> 王力生誕百周年紀念語言學會發表稿
- 影山太郎 1996 『動詞意味論—言語と認知の接點—』くろしお出版